

聖書：ヤコブ 1：1～4

説教題：試練と喜び

日時：2017年7月2日（朝拝）

今日から「ヤコブの手紙」を学びたいと思います。このところ、朝拝ではローマ書、ピリピ書とパウロの書簡を学び、第3聖日はマタイの福音書、夕拝では旧約聖書サムエル記を学んでいますので、パウロとは異なる著者の書簡として、この書を選ばせていただきました。この手紙の著者ヤコブについて考えられる人は3人います。一人は12弟子の中でもペテロ、ヨハネとともに中心メンバーの一人であったゼベダイの子ヤコブです。他の二人が書いた書がいずれも新約聖書に含まれていることを考えるなら、もう一人のヤコブも何かを書き残しただろうと考えられても不思議ではありません。しかしこのヤコブは12使徒の中の最初の殉教者となった人です。使徒の働き12章でヘロデ・アグリッパ王によって早くに殺されます。あの事件よりも先に彼がこの手紙を書いたと見ることにはやや難があります。二人目の候補者は12弟子の中のもう一人のヤコブ、すなわちアルパヨの子ヤコブです。しかし彼は聖書の中でほとんど知られていません。目立たない存在です。一方、このヤコブの手紙は権威をもって書かれています。この著者は指導者として人々に認められ、良く知られていた人だと考えられます。ですから冒頭の1章1節では、自分の肩書きさえ記す必要がありません。ただ「ヤコブがあいさつします。」と言えば、人々が十分に耳を傾ける人物でした。とするとアルパヨの子ヤコブの可能性も後退せざるを得ません。こうなってくると最も可能性が高いのは、主の兄弟ヤコブです。彼は12使徒ではなく、イエス様の地上の生涯の間は信者でさえなかったようです。しかし彼は復活の主に会い、信仰を持ち、ペンテコステを待ち望むあの120名ほどの兄弟たちの祈りの輪に加わっていました。そして使徒の働きから分かりますように、彼はエルサレム教会の指導者になります。そして彼はあのエルサレム会議でメイン・リーダーとしての役割を果たします。ちなみにエルサレム会議におけるヤコブの演説と、このヤコブの手紙とは文体が非常に良く似ており、そのことからこの手紙の著者が主の兄弟ヤコブであることが伺われます。またあの重要な会議を司るほどのヤコブだったからこそ、この手紙を簡単な自己紹介のみで始めることができたのでしょう。

彼は1章1節で自分のことを「イエス・キリストの實の兄弟ヤコブ」とは言わず、「神と主イエス・キリストのしもべヤコブ」と言います。彼はイエスの肉親という特殊な立場に訴えてこれを書いたのではありません。彼はしもべとして、謙遜に仕える者として、

この手紙を書き始めます。またそのような者だからこそ、彼の言葉は権威を持つものとなるでしょう。

一方の宛先人は「国外に散っている 12 の部族」。これは文字通り取れば離散のユダヤ人ということになります。あるいはこれを霊的なイスラエルと解して、異邦人クリスチャンを含む神の民と考えることもできます。ペテロの手紙ではそのような使われ方がされています。しかしこの手紙は読んで行くと分かりますように、ユダヤ人クリスチャンに対して書かれているようです。これはヤコブが特にユダヤ人クリスチャンを選んで書いたというよりは、まだ異邦人クリスチャンが本格的に誕生していなかった時期に書かれたため、クリスチャンとしてはユダヤ人しかいなかったという状況であったと考えられます。

ではいつ、どんな状況でこの手紙は書かれたのでしょうか。学者たちの間に議論はありますが、最も妥当と思われる背景は使徒の働き 8 章以降に記されているように、ステパノの殉教をきっかけにエルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、信者たちがみなユダヤとサマリヤの諸地方に散らされたことです。さらに後の 11 章 19 節にはこう書かれています。「ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行った」。このように文字通り散らされたユダヤ人クリスチャンたちは、行く先々で様々な困難に直面していました。母教会から遠く離れて霊的指導は以前のように行かなくなりました。また追われた身として社会的・経済的に圧迫されていました。そのような様々なプレッシャーの中で、彼らにはいつしかこの世と妥協し、その信仰が形式的なものになる危険がありました。そこからたとえば裕福な者をだけを重んじて貧しい者を顧みない態度、舌を制御せず使うこと、人間的な誇りや争い、祈りの軽視などの問題が現われて来ました。そんな彼らにヤコブは、信仰を持っていると言いながら、その行ないがなっていないというのはあり得ないこと、正しい信仰は必ず良い行ないに現われ出ることを強調し、彼らが直面している一つ一つの問題を取り上げ、実践的指導を与えているのがこの手紙なのです。

このようにヤコブの手紙は信仰者の「行ない」を強調するため、歴史的には様々な評価がなされてきました。特に有名なのは宗教改革者ルターが、ローマ、ガラテヤ、エペソ書といった手紙に比べて、このヤコブ書を「軽い藁の手紙」と評し、聖書の巻末に付録のようにつける扱いをしたことです。「人はただ信仰によって義と認められる」とい

う聖書の真理を再発見したルターにとって、「人は行ないによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではない」と語るヤコブの手紙は、福音的性格において他の書に劣ると判断されたわけです。もちろん私たちはルターが当時、行ないによる義を主張するローマ・カトリックとの戦いのただ中であつたことを覚える必要があります。しかし結論から言えば、パウロが語る信仰義認の教理とこのヤコブ書の主張は矛盾しません。ヤコブは決して行ないによって救われると言っているのではなく、真のキリスト教信仰は必ず良い行ないに現れ出なければならないと語っているのです。

さて冒頭の挨拶に続いてヤコブは2節からさっそくお勧めに入ります。2節：「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。」 単刀直入にメッセージへと入って行くその方法もインパクトがありますが、その内容も非常にインパクトあるものです。先に見たように、この手紙の読者たちはステパノのことから起こった迫害によってエルサレムを追われ、パレスチナ北部へと散らされました。その彼らが行く先々で様々な困難に遭遇していたであろうことは容易に想像が付きまです。経済的圧迫、社会的圧迫。毎日の生活も不便で、孤独感を味わうこともあれば様々な不安もあつたでしょう。病にもかかります。信仰を持っているのになぜこんなつらい目に会わなければならないのだろうかといった失望感も、その心に起こりがちだったでしょう。こんな状況に囲まれれば私たちの心は沈んでしまいます。暗い気持ちになり、力が出なくなり、これではもうダメだ！とため息ばかりが出て、心に希望がなくなります。しかも試練は一つ二つではありません。「様々な試練」とヤコブが書いていますように、次から次へと難しい状況が彼らに起こりつつあつたのでしょう。

しかしヤコブはそんな彼らに対し、「そのような試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい！」と言います。試練に会っているから落ち込んでいるというのに、その時は喜べ！とは一体どういうことでしょうか。しかもこの上もない喜びとせよ！私たちの常識をひっくり返すような言葉です。なぜそう考えるべきなのか、その理由が3～4節に語られますが、その前に2節で心に留めておきたいことは、ここで「様々な試練に会うときは」と言われていることです。「試練に会うときも喜びなさい」ではありません。「試練に会ったときは」あるいは「試練に会ったときに」喜ぶ。つまり試練には試練にだけ特有の積極的意味があるということです。試練が来たなら、そうでない時には得られない素晴らしい恵みの機会がやって来たと言って、この上ない喜びと考えなさい！とヤコブは言うのです。もちろん私たちは自分から好んで試練を求めるので

はありません。イエス様が主の祈りで教えて下さったように、「試みに会わず、悪より救い出したまえ」と祈るべきです。しかし求めないのに試練が与えられる場合があります。願わないのに、それに会う時があります。この「会う」というのは、こちらはそれを願っていないのに、それが自分の生活にやって来てしまうことを意味します。避けられないものとして与えられるのです。ここにヤコブが見ているのは神の摂理です。神がすべての状況を支配し、私にその試練を与えられるのです。ですから試練とは、ただ偶然に私の生活に降りかかって来る災いではない。それは意味もなく私の上に落ちて来た不運ではない。そこには神の明確な目的と神の御手があるのです。そしてもちろん神は良い目的を持って、それを私たちに与えられるのです。この視点を持つ時、私たちは試練をこの上もなく喜ぶことができるのです。「様々な試練」とありますように、試練の種類はここで限定されていません。あらゆる種類の試練にこれは当てはまります。私のこの試練も、あの試練も、このヤコブの言葉に従って考えることができるのです。

さてでは試練にはどういう良いことがあるのでしょうか。3節：「信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。」 私たちは苦しい状況、試練の状況はなるべくない方が良くと思います。そう願うのは生身の人間としては自然なことでしょう。しかしもし何事もなく平穏無事の毎日だけだったら、信仰はいらなくなります。そして信仰によって生きることをしないなら、私たちの信仰は弱くなります。運動選手も筋肉を使わない毎日を過ごしていたら強くなれません。強くなるためには負荷をかけたトレーニングをします。言わば抵抗が必要です。そのように私たちの信仰も強いものとなるためには試練が必要なのです。信仰の力を発揮せずには乗り越えられないような状況に置かれることが必要。そうしてこそ信仰の価値は輝き現れることとなり、またその信仰は強くされるのです。信仰の筋肉が付けられるのです。

この試練によって生み出されるのは「忍耐」とあります。これはクリスチャンがみな身につけるべき徳です。もし私たちに忍耐が培われないとどうなるでしょうか。少しのことでキレてしまいます。ちょっとしたことで自暴自棄になります。昨日までは信仰があったように思っていたのに、今日はまるでそれがいないような状態になってしまいます。そして絶望の状態に至ってしまいます。ですから忍耐が必要です。イエス様も福音書で「最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」と言われました。また「あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます。」とも言われました。この忍耐なくしては信仰の生涯を最後まで歩めないと言われていています。ですからこれはどうしても私

たちに必要なものなのです。

ここで言う忍耐とは、もちろん人間的な我慢強さや辛抱強さのことではありません。信仰が試されて生まれて来る忍耐ですから、信仰から生み出される忍耐です。神に望みを置くことから生まれて来る忍耐です。人間的にはどうやって今の状況に解決があるのか分からなくても、神により頼むがゆえになお望みを持ち、耐え忍ぶ忍耐です。これは試練を通してだけ私たちの内に培われるものなのです。

試練がもたらす益はこのことにとどまりません。さらなる目的が4節にあります。「その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」ここにまず「忍耐を完全に働かせなさい」とあるのを見て、もしかすると心ひそかに落胆する人もいるかもしれません。「完全に働かせる」なんて無理。完全に何かをするなんてことは、地上にある我々に果たしてできることなのだろうか。しかしこの意味は人間の力で完全にやれ！ということではありません。ここで言われていることは、忍耐は働くとき素晴らしい実を結ぶということです。だからその忍耐が完全に働くようにせよ！ということです。忍耐がもたらす実が完全に現れるまで、十二分に現れるまで、忍耐し続けよ！ということです。私たちに完全さが求められているのではなく、忍耐の実が完全に現れるように、その最終的実りが現れるまで取り組み！ということです。そうする時について現れて来る実とは何でしょうか。それが「何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となる」ということです。すなわち救いの最終状態、聖化の完成した状態、私たちの救いのゴールの状態です。それは神のかたちとして造られた私たちが到達する最後の完成の状態であり、イエス・キリストに似た姿であり、神のご性質にあずかると言われている状態です。あるいは一言で栄光の状態と言っても良い。ここに達するには忍耐というプロセスを通る必要があるのです。信仰による忍耐の歩みこそ、この素晴らしい最後の祝福された状態に達するための通路なのです。

果たして私たちは自らを振り返って、自分の忍耐はどうでしょうか。私たちはキレやすい者でしょうか。それとも忍耐を日々培われている者でしょうか。私たちの人生には色々なことがあります。それらは忍耐なくしては乗り越えられないものです。しかしむしろヤコブが言っているのは、忍耐を培うために色々なことがあるのだ！ということです。神がそのようにして私たちに忍耐を培おうとしていてくださる！忍耐は先ほど人間

的な我慢とは違うと申し上げました。聖書的な忍耐とは信仰から来る忍耐です。聖書的な忍耐の表現の一つとしてIテサロニケ1章3節には「望みの忍耐」という言葉があります。すなわち私たちは望みを持つ時に忍耐できる。望みがあるから忍耐できる。私たちが持てる望みは何でしょうか。それはどんな試練の中にあっても神の御手によらないものはないということです。神がこのことの上にも良い目的を持っておられる。そしてこのことを通して私を世の終わりに完成する完全な聖化の状態へ導こうとしてくださるということです。「様々な試練に会うときは」とヤコブが言っていますように今、私が遭遇している試練にもこのことは当てはまる。私たちはそのことを思って試練をこの上ない喜びと捉えるクリスチャンの幸いに生かされたいと思います。どんな試練でも、それは神の御手の下で私にと与えられている神の特別プログラムです。神は特別な意図をそこに持っておられ、これによって私をより祝福の高みに引き上げようとしておられます。そのために必要とされる信仰による忍耐を私に培おうとしてくださっています。そのプロセスを経て、神が私たちをやがての日に「何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者」としてくださるのです。